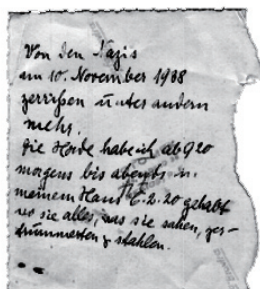


デジタルパブリッシング

船は出てゆく

テキスト、写真、イラスト、マンガ、ビデオ、音声 調和する本の時代がやってくる
ボイジャーは一人一人の自由な“出版”活動をお手伝いします



1938年11月、家に侵入したナチスに破り捨てられた両親の写真

同じ写真が息子のアルバムに残されていた

"I Photograph to Remember" より ©1991 Pedro Meyer

私たちは心の中にいくつもの物語を抱えています。
家族の思い出、ご自身の歴史、苦難をへた証言・写真
の数々 貴重な資料はどこかに眠っていることで
しょう。その声を知らしめる出版の手段を私たちはよ
うやくこの手にできるようになりました。
人々の出版活動を支援すること、あなたの本を、確実
に、世界へ、そして永続的に、届けること、これがボ
イジャーの目指すデジタル出版の世界です。

目次

理想書店——仮想ではなく理想 2

目の見えない人に本を届ける
—— 2010年「国民読書年」にむけて 5

ボイジャー 歩いてきた17年の後に 9

VOYAGER



お問い合わせ： 株式会社ボイジャー

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-41-14

<http://www.voyager.co.jp/> tel. 03-5467-7070 fax. 03-5467-7080

e-mail: infomgr@voyager.co.jp

仮想ではなく理想——ネット上に本格化する出版

『理想書店』はボージャーが運営するデジタル時代の書店です。

ここには講談社、角川書店、新潮社という日本の代表的出版社の作品とともに、インディペンデント出版社・出版者の作品がならんでいます。コンピュータでの閲覧から iPhone などモバイル端末での閲覧までをカバーする試みが始まっています。そしてここで販売される全ての作品は、視覚障害者の読書を支援する音読への対応が備わっています。

デジタルにつくられた出版物はどのように残されていくのか。これはボージャー創業以来の課題です。デジタルな出版物は、刹那的で、読みとばされ、その場かぎり、という立場におかれ、それでいいのだとする考えに守られて、後世につたえられるメディアとしての立場を放棄させられてきたのです。売ればいいという考えであれば出版物は残るより、はやく消え去るほうが好都合だったはず。デジタルな本を残されるべきものとして真剣に顧みようとする出版人はほんのわずかでした。

紙の本は、物理的に残存する有効な形をもっていました。これは出版の思想によるとばかりいえるものではありません。本という紙の媒体が結果としてもたらしめたものです。このことが図書館を生み、私たちに貴重な知識の蓄積を可能にしました。残るものだからこそ、恥じない仕事をそこに残そうという考えが醸成されていったのです。本が残ることを理解し、自分の心を刻みこむものとして人はこのメディアに向きあってきたのではないかとおもいます。

デジタルな出版物を後世に残すことはできないか、特徴ある書店や小さな図書館をネット上にすることは可能なのか、大掛かりなシステムを準備することなく、個人の力でそれをできないものか……

ボージャー『理想書店』は、2000年9月にスタートしました。デジタルという術を頼りに、ただものではない本と向かいあってきたのです。それは素手で虫を追う子どものようでありました。

❖あらゆる液晶デバイスは本になる

“今そこにある液晶デバイスを本にします”このスローガンは、2005年の東京国際ブックフェアではじ

めてボージャーが掲げたものです。その後、デバイスの数はつぎつぎに加わり、進化の道を歩きました。一つの願望を込めて発した私たちのスローガンはいよいよ現実のものとなり、モバイル端末での読書は着実に人々の生活に浸透していきました。



2005年東京国際ブックフェアで掲げたボージャーのポスター

かつてはコンピュータ (PC) をはじめとしてモニター画面で本を読むことなどできないというのが趨勢でした。ところが、2003年末から始まったパケットフリー導入以来、携帯電話でコンテンツを楽しむ生活スタイルが徐々に浸透しはじめ、そこにマンガを中心とした読書が入り込んでいったのです。PC どころかわずかなサイズでしかない携帯電話の画面で若者たちがマンガや小説を読んだり書いたりするようになると、出版社はこぞって携帯に作品を配信するようになりました。かつてこんなもので本は読めないとされた PC と比べてさえも表示品質、表示サイズともに劣る携帯電話で、若者はマンガや小説を読んだのです。見た目の品質などよりも、いつでも、どこでも、欲しい時に即応えてくれる通信という機能こそ、彼らにとって読書に欠くことのできない大きな要素だったといえるでしょう。

そして今、iPhone 3G、iPod touch、Kindle、Android 端末、PSP、DSi というように通信と密接に結びついた端末が人々の読書生活に大きな影響を及ぼすようになりました。待ち望んでいた理想の本として、あらゆるデバイスが本となる日が人々にはハッキリと見えてきたのです。

❖ PC は書斎であり書店であり広場である

一方で PC は、インターネットに常時接続する環境が定着しました。生活に欠くことのできない情報機器として、ここで調べ、ここで読み、ここで発信する知的活動のプラットフォームです。書斎であり、書店であり、図書館であり、広場である存在になっています。デジタルでしかできないことの中には、大きな使命が託されているとおもいます。その一つに、既成のきまりごとや経済的な秩序、ものの流れを読み手本位に、書き手本位に組み直すことがあります。私たちにとって利便であることは何であるのかを根本から考え直すことです。その意味ではデジタルが提示している可能性には、私たちに新しい世界を予感させるいくつもの鍵がかくされています。実現にはなお多くの難関が待ち受けています。でも、可能性に賭けましょう、だから『理想書店』と看板を高らかに掲げてきたのです。

本を読んでいる時、人は本を開き、開いた 2 ページを見えています。一冊の本はページを束ねたもので、例え分厚い書物であろうとも、読んでいるのは常に目の開いたページです。常時接続と場所を選ばないインターネットの利用環境が整い、読むべきページをどこにいても素早く表示することができるようになるのなら、丸ごと本を一冊手元に送ることはなく、その人が欲する目の 2 ページを届けることで本を閲覧することができるようになります。万巻の書物は手元にある必要はなく、どこか雲の上にもでも格納され、そこからみんなが思い思いに必要なページを取りだして読むことも可能なのです。PC には、書店として充実した機能が備わっているべきでしょう。ここでは本を調べ、立読みし、購入し、自分の書棚に格納できる、書店でもあり図書館でもあるようなものになる必要があるのかもしれない。

『理想書店』は、まずネット書店として装備しなければならない基準を PC 上に確立することからはじめています。ボージャーが開発した T-Time Crochet(ク

ロッシェ)はこうした考えに基づいて『理想書店』に装備された仕組みです。ボージャーの電子出版形式であるドットブック(.book)であれば、これを Crochet の書架に置くことが可能です。今までに .book で作られた 25,000 ファイルの作品がすべて適応できるだけでなく、これから作られるであろう作品はすべて Crochet による展開の道が開かれています。



『理想書店』より
Crochet 表示された
幻冬舎コミックス
『Web スピカ』



膨大な本のページの中
から必要な該当ページ
を瞬時に表示してくる

Crochet では、書架から本を取りだすように本を選び、目次を表示したり、先頭ページにも読みかけのページにもジャンプすることができます。「拡大ビュー」でコンテンツの表示を拡大して見ることができます。ふきだしの文字が小さい場合や、欄外の文字、コミック雑誌での記事ページで、拡大して読みたいときなどに使用します。

Crochet は専用のアプリケーションではなく、Web ブラウザのプラグインとして動作します。ページの記述は通常の HTML と同じように行うことができます。例えば、バナーや購入ボタンを配置、購入ページへの誘導。QR コードで、ケータイ販売サイトへの誘導。コンテンツ内の作者サイト、コミュニティサイトへのハイパーリンクなどによって、その本が保持する独自の世界と、Web を介したより広がった外界との連携を演出できます。既に作られた .book はすべてそのまま Crochet 上での利用ができます。.book は、携帯電話、iPhone/iPod touch での閲覧をはじめ DS、PSP などのゲーム機、そして Android、Windows Mobile、またすでにアナウンスされている Nokia のスマートフォ

ンなどへの対応が可能になります。配信に際しては、暗号化された状態のまま、.book をサーバ上でページに分割して送信し、Crochet のプラグインで表示します。送受信しているデータは、暗号化されたまま分割された状態であるため、不正にデータを取得しても可読できず、配信データを強力に保護します。

❖モバイルが本

私たちはどのような状況で本を読んでいるでしょうか。通勤途上や旅先、一息カフェでのつかの間、お休み前のベッドの中 机に向かい本に対するような機会は非常に少ないことに気づかされます。このことは本がモバイルであるということを改めて意識させます。文庫や新書が私たちの生活に深くは入りこんでいたのは、本のコンセプトとモバイルという形態が密接に関わっていたからでしょう。

本はモバイルなのです。であるならばコンピュータ(PC)はある意味で電子的な出版物を拘束してきたといえます。ワイヤードされた空間に、どっしり重いPCを繋ぎ止め、パワフルな検索をかけて これは、やがて到来するデジタル出版時代の夜明けを待っている姿だったのだとおもいます。そこから外へ、広い世界へ、本を持ち出すことこそ私たちの悲願でした。

2008 年 7 月に発売開始となった iPhone 3G は、モバイル端末による読書にとって“待ち望んでいた理想の本”というべきものでした。閲覧に適した表示サイズ、タッチパネル、加速度センサーという使い勝手、携帯電話や、有線 / 無線のインターネット LAN 環境に対応した通信をカバーしたものです。ここには今後新たに出現するであろうモバイル端末の基準が明らかに示されていました。

『理想書店』の Crochet と iPhone に象徴されるモバイル端末が深く結びつき、書店で探し、調べ、モバイル環境に本を移して閲覧が可能となれば、PC は書店であり、図書館であり、モバイル端末が本であるというデジタル出版時代の本と私たちとの新しい関係が生まれていきます。その中でモバイル端末が担う本としての機能と役割はより明白になっていくことでしょう。魅力的な本が集まり、確かめ、読者は自由に、何の規制や干渉を受けることなくモバイル端末でこれを読み、自らもここを発信のペースキャンプとしていく。これは仮想ではなく、実現すべき私たちの理想です。



大谷和利著『iPhoneをつくった会社』(アスキー新書)は、iPhoneでの閲覧ができるはずだった。アップルはこの作品を審査によってApp Storeでの販売を拒絶した。アップルの社員、経営者、製品他について書かれたものは、内容の是非に関わりなくApp Storeから除外の対象となるという通告だった。待ち望んだ理想の本の到来を心から喜んだわれわれにとって大きな幻滅となった。そして、モバイル端末を介した出版の自由について考えさせる契機を与えた。

グーグルは書籍のデジタル化を強引に推し進めてきました。アマゾン「なか見検索」と称してデジタル化を実行し、通信機能を有した電子本端末「Kindle」を自ら販売してビジネスの展開に着手しています。国立国会図書館もまた補正予算を梃子にした蔵書のデジタル化を加速させることは明らかなです。これらの動きは、デジタル化による広汎な書物の解体と、書物が保持してきた知の再構築のはじまりなのです。日本の出版界がデジタルに対してずっと示してきた、売上の危機回避の一策でしかないデジタル化とは意味合いを異にしています。

そんな利根的なものでは決してありません。デジタルへの移行という世界をおおう巨大な地殻変動の中で、一方、私たちは読み手、書き手の自立を願う小さなメディアの必要を自らの手で行おうとしているのです。それがボイジャーの『理想書店』です。



イラスト：伊達正則

確実に蝶を捕らえたいとおもえば、いつでもあなたは、野原に巨大な金網を張ることができます。しかしわたしの興味は、たとえ網がなくても、素手で、蝶を捕らえることなのです——

フランソワ・ライシェンバッハの言葉 (ゴダール全エッセイ集より)

好評発売中



T-Time ライセンスキー ¥1,050(税込)
ダウンロード <http://www.voyager.co.jp/T-Time/>
日本語版 Windows 2000/XP/Vista
MacOSX 10.2.8 以降 (10.3 以降推奨)



azur ライセンスキー ¥2,100(税込)
ダウンロード <http://www.voyager.co.jp/azur/>
日本語版 Windows 2000/XP/Vista
MacOSX 10.2.8 以降 (10.3 以降推奨)

目の見えない人に本を届ける



❖提携が拓いた道

電子本ドットブック(.book)*が視覚障害者にもアクセスできるようになり、市販のドットブックをそのまま音声読上げして読書を支援することができるようになりました。

かねてから読上げ対応に積極的だった講談社、グーテンベルク 21、二十一世紀戯曲文庫(日本劇作家協会)、広汎なインディーズ作品などに加えて、このたび新潮社、角川書店が参加を表明しました。読上げ対応のドットブックは今後作品数を大幅に増加していくことになります。これらのドットブックは健常者が読むものとまったく同一のものです。同じ価格であり、販売されるものであるかぎり読上げに特別な申請や許諾を受ける必要もありません。版元側でドットブックの読上げ許諾をチェックしてさえいれば、これを読上げるエンジンを経営することで視覚障害者の読書が可能になります。

全国で視覚障害者は 30 数万人いるといわれます。弱視を含め極度の視力の衰えに悩む人たちを含めるとその数は 100 万人を越えます。視覚障害者のあいだではスクリーンリーダー*といわれるパソコン上での読上げソフトが普及しており、この方たちの間でつかわれているスクリーンリーダーのひとつに株式会社高知システム開発*の「PC-Talker」があります。

今回の視覚障害者の読書支援は、高知システム開発とボイジャーが提携することで道を拓くことができました。高知システム開発は、1998 年にスクリーンリーダーである「PC-Talker」を導入し、この分野におけるトップシェアを占めています。その後さまざまな製品を開発され、今回デジタル化された書籍を簡単操作で楽しめる読書システム「MyBook(マイブック)」を完成しました。

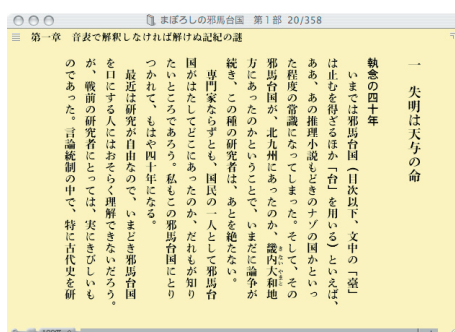
MyBook があれば、デジタイズ図書をはじめとして青空文庫、ないーぶネット、点字図書、PDF 文書に加えてドットブックが読上げ対応可能となったのです。

❖「私たちにとって、本は本でない」

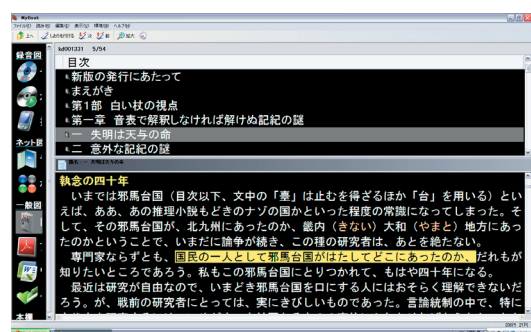
どのようにして視覚障害者の読書支援が実現したのか？

私たちボイジャーは、2006 年はじめにドットブックの文字拡大機能を強化し、弱視の方を含む視力低下をきたした高齢者などにむけてサービスを加えました。そして同年 10 月、ドットブックの音声読上げ対応を、株式会社アルファシステムズの「電子かたりべ」プレーヤーの協力を得て提供いたしました。これらの対応は読書に支障をきたす方々を対象としたもので、まったく視力を失った方達を対象とはしていませんでした。私たちはロービジョン対応という言い方をしていました。ロービジョンとは、高齢化により視力が低下している人びとをふくんだ広い意味での視覚障害の世界を総称してつかわれています。しかし、視力を失った方たちにとっては、画面のすべてを音によってしか確認することはできません。そのためには可視化という文字拡大の対応を越えてドットブックの音声読上げを強化する必要がありました。

ドットブックは著作物としての権利保護のための処理が施されています。この保護措置によって、音声読上げエンジンは電子本の情報を解読できず、読上げることができなくなってしまうのが一般的でした。不正コピーなど儲けを阻害する要素の排除こそ大事なことで私たちは考えてきたのです。この姿勢は結果として読上げのできない電子本をつくることでもありました。



講談社文庫『まぼろしの邪馬台国』(宮崎康平著)の .book ページ表示



「MyBook」で同じ .book を読上げた際の表示例

私たちは電子本で活字を大きくしたり、白黒を反転したりする等々を必要とする視覚障害者の世界について十分な理解をしてはいませんでした。音声読上げにしても、デモをしていかに機能として優れているかを訴えることだけが先走っていたにすぎません。それができたとして、目の不自由な人が操作する配慮は後回しになっていたのです。

時間をかけ、私たちは視覚障害者へ貢献できる電子本の利点を再認識していきました。障害者支援に関する集会や研究会に足を運びました。そして現実を知ったのです。

情報収集にハンディキャップを負う現実を彼らはどのように克服しようとしているか。さまざまな機器を巧みに利用して必死に情報をつかむ姿には、健常者が難なく当たり前のようにやっている日常との対比において、深く頭の下がるおおいをしました。

そうした情報機器に常に存在する音声装置や点字自動表示をみて、すでに完成した技術がおおく存在していることに気づかされました。障害者支援の各種技術を自力で開発しなければならないとばかりおおいこみ、そうすることが独自の優位性であるという認識しか持てないでいたのです。長いこと「デファクト・スタンダード」を目論む体質がどうしても抜けずにあったといえるかもしれません。

ある日、こんな発言を耳にしました。「私たちにとって、本は本でない、単なるつるつるした紙の束にすぎない。私たちは本を読むことはできないから」。こう切り出したのは全盲の人でした。そして、続けて発した言葉に吃驚したのです。「電子本は私たちにとって本です、なぜなら、それは読上げることができるから」。

ここからはじめてドットブックの視覚障害者への本格的な対応が始まっていきました。

❖角逐しあう排他性

もしドットブック(.book)が何らかの方法で情報を開示し、そしてスクリーンリーダーなどの音声読上げエンジン開発側でも著作権保護に関する何らかの対応がなされるのなら、両者は相互に手を結び視覚障害者への支援をはるかに前へ進められることになります。自分たちの技術に他人の技術を結び合わせることで世界は広がります。少なくとも音声読上げを欲している目の不自由な人たちへ、開発者が手を組むことで支援の促進が図られるのです。開発に関わるコストもスピードもクオリティも、ずっと有利に進められます。

日本ロービジョン学会で「視覚障害者による携帯電

話・パソコン・インターネットの利用状況に関する調査」というものが平成19年に発表されていますが、これによるとパソコンの使用実態は413人中391人で、狭い範囲の調査結果ですが、なんと95%の人が利用しているのです。

「電子本は私たちにとって本です」の発言を顧みるまでもなく、よく考えてみれば電子本にとって視覚障害者は健常者と同じ顧客なのです。当たり前のこととして読上げできる準備ができています。便利なサービスが誰にでも提供できるようにすることは私たちの根本の仕事です。そのことによって多くの人が利便の享受や知識の獲得に役立てられるなら、ビジネスは伸びていくことになります。

技術を先端のものと考え、技術が保証するサービスを独自の財産だとおもい込んでいけば、そこには自ずと排他性が生まれます。技術の先進性とは一方で技術の排他性との戦いの中にあるのだとおもいます。互角の能力を角逐しあう排他性がどんな意味をもっているのか、それが及ぼすハンディキャップある世界への影響をよく考えなければなりません。視覚障害者への貢献さえもが特殊な優位につながる排他性をもつのだとしたら、「電子本は私たちにとって本です」という静かな叫びに水をかぶせる行為だといわれても仕方ないでしょう。

❖視覚障害者の描いたイメージ

読みたいと思ってくださることこそ本が売れていく根本にあるものでしょう。問題は、本そのものが誰でも読める対応をすることであり、デジタル化を推進する私たちにとって、それをいかにデジタルで一刻も早くできるのか具体的に示すことだったのです。もしこれが可能になるのなら、健常者が読む本も視覚障害者が読む本もまったくおなじものでよいこととなります。読みたいとおもう人が明らかに増えることであり、本はさらに顧客を獲得できることになり何冊も多く本が売れることにつながるわけです。

ドットブックを利用する出版社は多数存在します。日本の代表的な出版社がドットブックをつくっているのです。ベストセラーを多く世に送る出版社が採用する電子本形式ならば、それら本の出版と同時に視覚障害者が読書を楽しむことができるであろう、視覚障害者が願ったことの本質はここにありました。彼らの切実さが厳然としてあると同時に、そこには私たちの努力によって到達できる世界があきらかに映しだされていました。まさにラストワンマイルの頑張りによって完

成できる視覚障害者への読書支援であったわけです。

ボージャーはT-Time/ドットブックの技術情報を高知システム開発へ開示し、高知システム開発は圧倒的に普及するスクリーンリーダー「PC-Talker」に連動する電子本読上げ専用アプリケーションとして「MyBook」を開発し、可読の対象にドットブックを加えました。

ボージャーはドットブックの機能を細分化し、独立して「読上げ」の設定をあらたに準備しました。これによって出版社は「読上げ」指定をチェックするだけで自社の発行するドットブックの読上げ対応を完了できます。少なくとも新規に発行するドットブックについては付加作業もなくこれをスムーズに実行できる状態となったのです。

❖開かれた自由な立場

高知システム開発のMyBookとボージャーのT-Time/ドットブックは、昨日までは全く別の場所で、全く別の目的で活動していました。二つの会社のもてる力を合わせることによって新しい何かが生まれることをいち早く察知したのは、そこに生まれるサービスをイメージできた視覚障害者でした。読上げ機能と電子本との橋渡しをすることで一般図書を視覚障害者も読めるようにできることを一番理解していたのです。彼らの呼びかけによって、はじめて相互に話し合い、持てる力を出し合い、そこに今まで両者が培ってきた力を少し注ぐだけで新しいサービスが生まれていったのです。効率を発揮し、投じられる開発時間は大きく短縮されました。

さらにつけ加えるならば、それぞれのソフトウェアは自由な立場を保持しています。MyBookは音声読上げソフトとして独立しており、T-Time/ドットブックとは関係なしに全く別のビジネスに対応することができます。MyBookはT-Time/ドットブック以外の電子本ビューアに対応することも可能なのです。

ドットブックはどうかといえば、一つの基準として読上げ機能を備えているということであり、その意味ではMyBook以外の読上げソフトを包含することもできるわけです。こうした柔軟な協力の仕方がソフトウェアの排他性を押し出すのではなく、競争相手も含んだ広く開かれた基準を示そうとしているのです。

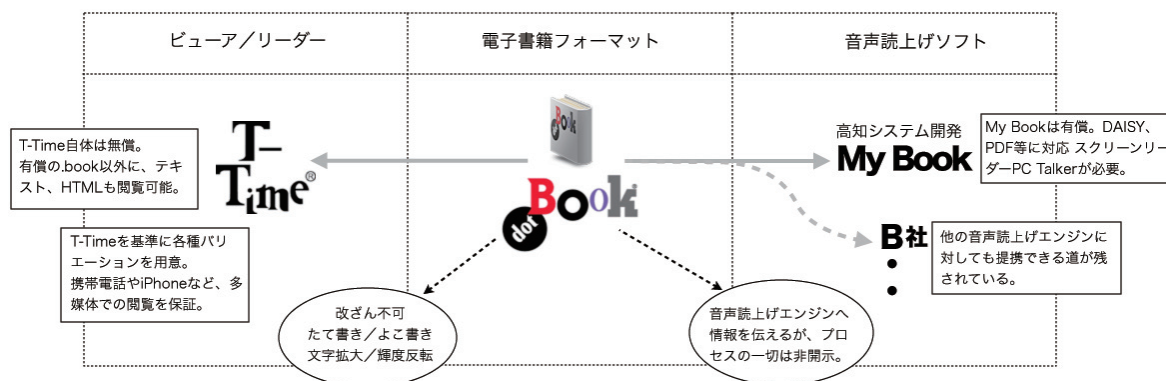
❖本当の美談はこれからだ

すこし美しすぎる話をし続けてきました。書かれている文脈の先にあるものは視覚障害者にたいする読書支援の新しい輪がつつぎつつひろがっていく世界です。だれもがそう信じて疑わなかったことでしょう。

電子的な出版に備わってきたかすかすのパワーが本を読上げるという形で視覚障害者へのサービスを包含し、健常者のそれとシームレスに一体化することになった、視覚障害者自身が橋渡しをし、ソフトウェアの開発者、電子本フォーマットの開発者、そして出版社の協力関係が成立った、たしかに美しい話です。そうだったなら、なぜすべての出版社がこれに賛同しないのか、限られた出版社の名前しかここに明記されていないのはどうしてなのか、素朴な疑問が生じたのではないかとおもいます。いくつかの問題が横たわっています。

賛同しないと明言する出版社はありません。しかし、明確にやろうと言わない出版社があることも事実です。もちろんさまざまな理由があるだろうことは理解できます。事情に耳を傾け納得することは多々あります。ただ一方で、作家がこれに同意しないとか、作家の同意をとるのに時間がかかるということが進まない大きな理由だとする根強い考えがあります。作家は本当に視覚障害者の音声読上げに反対しているのでしょうか？

ある作家が自作を電子化しないという考えをお持ちだということは理解できなくはありません。しかし電子化を許諾している作家が視覚障害者への音声読上げ



電子書籍フォーマットを中心に、ビューア/リーダーと音声読上げソフトとの関係

を拒絶する理由とは一体なんでしょう。新しい機能の追加に対して手続きが必要になる問題は大きいにあるでしょう。しかしそれと作家が拒絶することはまったく次元が異なります。時間のかかることはわかります。時間がかかることと、やらないこととは意味が違います。少なくともやることを表明することにはいささかの躊躇の理由など見当たらないのではないのでしょうか。

出版不況がかまびすしく叫ばれています。一方でモバイル端末での小説、マンガのアクセス数、市場売上ともに大きな実績を導きだし出版の未来をリアルに浮かび上がらせてきました。出版のデジタルへの傾斜は明らかです。そこには何のためのデジタルかが語られることはまれであり、今そこにある危機を回避する手段としてデジタルの我田引水が飛び交っているだけのようによにみえます。

電子出版は少なくともこの日本に約20年の歴史を持っています。そしてその間、出版の全盛のなかでデジタル化に対してこれといった大きな役割を演じることなく今日を迎えてきたのは、日本の出版社であったといわざるをえません。方針転換の舵を取り、一挙にデジタルへとなだれ込んできている動きのなかで、出版のデジタル化における忘れてはならないことについて、視覚障害者への読書支援について、出版社こそがリーダーシップをとり、呼びかけをしていく必要があるようにおもいます。

* 注：株式会社高知システム開発について

株式会社高知システム開発は、1983年7月設立、幅広いコンピュータ技術を持つシステムハウスとして誕生。1983年に視覚障害者用ワープロの開発に着手し、翌年日本初の「AOK・点字入力・音声出力ワープロ」を完成させた。以来、「視覚障害者の生活支援、社会参加支援」を目的に、高度情報化社会の環境に対応する視覚障害者向け各種ソフトウェアの開発、販売、アフターサービスを行っている。

詳細は、<http://www.aok-net.com/index.htm>

* 注：スクリーンリーダーについて

画面に表示された情報を音声で読上げるソフトウェア。視覚障害者は画面を見ながらマウス操作をすることは困難なため、画面の読上げだけでなく、操作を読上げる性能も含めて「スクリーンリーダー」としている。

* 注：ドットブック (.book) について

2000年に商用に電子本を販売することを目的としてボイジャーが開発した電子本フォーマット。『T-Time』をビューアとし、縦書き文庫本スタイルで可読する。インターネット上で全文が立ち読みでき、かつ不正コピーの防止等ができる。講談社、集英社、角川書店、新潮社、文藝春秋、筑摩書房などがすでに採用している。ドットブック作品を販売する「理想書店」等で立ち読みが可能。



講談社『大きな文字の青い鳥文庫』の贈呈風景。筑波大学附属視覚特別支援学校にて(2009年4月)。講談社は全国66ヶ所の視覚特別支援学校に20作品35冊の『大きな文字の青い鳥文庫』シリーズを寄贈した。これらの本はボイジャー.bookデータから出力されたものです。

ボイジャーの「理想書店」で販売している電子本は、約3000作品全てが読上げに対応しています。

理想書店はこちらから→

<http://www.dotbook.jp/dotbook/>

.bookの読上げ対応詳細については、以下報道資料もご覧ください→

http://www.voyager.co.jp/hodo/081121_hodo.html

その他お問い合わせ・資料請求はこちらまで

株式会社ボイジャー

電話：03-5467-7070

e-mail:infomgr@voyager.co.jp

ボイジャー 歩いてきた 17 年の後に



❖本とは ほんとうにただものではない！

これは清水徹の『書物について』—その形而下学と形而上学—(岩波書店)につけられた帯に書かれたものです。この本の中で清水徹は、本を次のように定義しています。

記号が何らかの「支え」のうえにあり

時間が経過しても同じ意味内容が発信される装置
持ち運びが可能な(空間をも征服した言語装置)

本とは、何か支えとなるもののうえに記号が載せられていて、それを眼にすると、記号に託された意味作用がそこで再現されるような、持ち運び可能な物質的装置だということです。

紙の媒体でなければならないとは書いてありません。紙から離れた祖国喪失者のように、電子的な本を求めて流浪する身にとって、清水徹の定義は私たちボイジャーのコンパスとなりました。そして、あらゆる電子デバイスは本になる手掛かりをここからつかんでいったのです。

小さな会社の一つの夢 こういう希望がちっぴけな会社のなかにどのように形成されてきたのか、お話ししたいとおもいます。

❖そこにある 3 つの危機

電子的な出版には、常に 3 つの危機が存在しています。いまそこにある危機といってもいいでしょう。本は存在すれば誰でも読める、存在すれば消えにくい、という大きな利点をもっています。では一体電子本はどうか？少なくとも三つの大きな問題をかかえています。

1. 充電の危機→電気がなければ読めない

2. 撤退の危機→生産中止

3. 分裂の危機→Reader/Viewer がまちまち

充電の危機とは、極めて日常的なことだろうとおもいます。電池切れは誰もが経験することです。電子本とは、大なり小なりコンピュータを内包するハードウェアの上で見ることを前提としています。だから電気を必要とするわけです。ここを逃れられません。新しい本は、電気をつかう新しい乗物(ビークル)の上にあ

るとなれば、その乗物は誰がつくっているのか？出版人ではありません。つくれば売れる保証などないわけですから、出版人の強い依頼を受けたところで、売れなければハードはすぐに生産中止になってしまいます。自分でやっていないのですから文句をつけようもない、つまり常に撤退の危機が存在するわけです。



この写真をみて、皆さんはどう感じるでしょうか？おなじ乗り物でも赤ちゃんがバギーに乗っている姿を誰も奇妙だとおもわないでしょう。どっちが生産中止になりやすいか？共通するものが電子本にはつきまといます。

ハードウェアは常に生産中止と新製品の導入を繰り返してきました。「撤退の危機」が渦巻いているような世界なのです。

分裂の危機とは何でしょうか。新しい出版は、四つの領域を持つといわれます。コンテンツの領域とハードウェアの領域、デリバリーの領域とフォーマットの領域です。コンテンツの領域とは、出版社やテレビ局・映画会社が支配している世界です。ハードウェアの領域とは、日本を代表するメーカー大企業が担っている領域です。デリバリーの領域とは、配信に関わる巨大な通信企業、免許事業で寡占している状態、誰が入り込める領域ではない部分です。残ったフォーマットの領域だけが私たちの活動できた場だったといえます。ここに有象無象、小さなものたちが入り込み、読者をそっちのけに角逐合戦に明け暮れ、離合集散を繰り返してきました。フォーマットは四分五裂状態、分裂の危機ということになったのです。

これらの危機を背負いながら 17 年の道のりを歩き、失敗の憂き目を何回となく経験してくると、いやおうなしにいくつかの教訓を身につけます。本にとって技術とは「しんがり」なんだ、最後尾を後ろ向きに守る後衛の役割なんだ、ということです。技術とは常に最先端に注目が集まりますが、実は後ろ向きの技術とい

うものは意外と重要なものです。当たり前のことを着実に、そして変化せずに保つということのために必要な技術も厳然としてあるのです。

よく出版とは何かといわれて、それを「変わる内容、変わらぬシステム」だといいます。中味はどんどん変化していったいい、しかし目まぐるしく変化する中味は一貫して変わらぬシステムが支える、それが出版なのだというわけです。確かに本とは、形式は十年一日、ほとんど変わっていません。格納される形式は変化しない同じシステムです。変わったのは中味と製造効率を上げるための技術革新だけです。

電子本を閲覧するハードウェアに目を転じてみましょう。このハードをつかえば5000冊入るとか、空から本が降ってくるとか、すべてを可能にするバラ色の美辞麗句をならべたてます。5000冊入ったとして、その十分の一読む時間でさえハードは生き延びられたでしょうか？まずハードは短命です。携帯電話の新機種は洪水のごとく毎日TVコマーシャルに流れています。とにかく変化を求めているのです。そしてまた新しくでてくるハードが同じ美辞麗句をがなりたてるのです。電子本にとっての出版とは、「変わる内容、変わらぬシステム」どころか「変わらぬ内容、変わるシステム」だったのです。

こんな乗り物(ビークル)の上に、出版という自由を叫ぶことはできたでしょうか？このデバイスでしか読めない……しかも短命。生産中止になればもろともに全てが潰えてしまうのです。ハードは夢のようなことをいい、そしてすぐに逃げ去ります。日本を代表する企業の面々が率先してやってきたことです。これはない！本という名に値しない。電子本に与えられたこれが人々の烙印だったのではないかとおもいます。

私たちは学びました——最低限二つの課題が見えてきました。人は何のために本を読むのか、人は何のために本を書くのか、電子本のたどった道は決定的に本を裏切っていました。清水徹の本の定義を再び思い出してみましょう。

「ある記憶を封じこめ、それをふたたび見るとき、記憶が蘇ってくるような、時間を征服した装置」

いつまでも読める、誰でも読める、少なくとも最低限この二つがなければ「本」の名に値しないのです。どん底の中ではじめてこう自覚したのです。

技術は本にとってどれほどのものなのか。最先端を行き、排他性を強めて価値を与えるハードウェアとはまるで相容れない何かがそこにあるようにおもいます。むしろ排他性を越えた共通する技術を基盤にする観点

が本や出版には求められるのです。

我田に水を引くな、水を配るべきだ、先を行くんじやない、メディアの殿軍(しんがり)でいい……これは産業やビジネスの問題ということより、人間の問題です。読者の問題です。人間をテーマにする出版やジャーナリズムであれば当り前のことだったといえるのかもしれませんが、デジタルが人間の欲や金のことを第一の課題にしてきたことは否めない事実だったでしょう。

課題を意識したのは2004年のことです。ここから再出発できるかどうか、ボージャーはまだその途上にいます。壮大なる無駄で終わってしまうのかもしれませんが。けれど挑戦する小さなメディアでありたいと切におもっています。

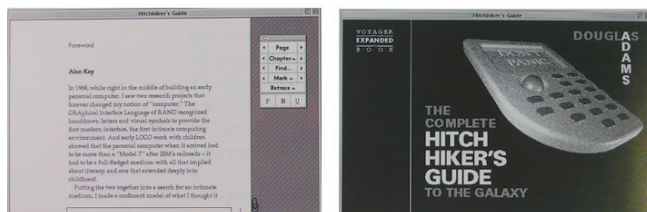


1991年10月発表された
Macintosh PowerBook 100
ボージャーの電子出版を加速させる
原点となった

❖一体なにをしてきたのか？

2004年がボージャーのターニングポイントでした。ここにいたるまで、1992年からの12年間の歩みについて、たちかえってみることにします。

ボージャーの電子出版への取り組みは、米国で始まりました。1990年代初頭に現れたアップルの最初のノートパソコンがその契機となりました。このモノクロ液晶画面のなかに私たちは「本」を幻視したのです。ここを起点として、どのような電子出版の試みが繰り返されてきたか、その代表的な例を順にご覧いただきます。



米国ボージャーがはじめて作った電子本「エキスパンドブック」の版面です。そのとき作られた3冊のうちの一つ、ダグラス・アダムスの『銀河ヒッチハイクガイド』。この版面がアップルのノートパソコンに表示されたのです。この時同時に大ベストセラーとなった

マイケル・クライトンの『ジュラシック・パーク』も紙の出版とほぼ一緒に電子本として発行されました。

本の基本的な機能である、目次、ページサーチ、文字検索、付箋・栞、アンダーライン、メモノートなど、ほとんどのものはこの時すでに完成の域に達していました。

◆ありものの輝き

新しい技術が吹き込まれ幾多の希望がみえてきても、実現にはまだまだかなりの資金を必要としました。“Bring Your Brain”というスローガンがボーイジャーにはありました。金をつかうな、頭をつかえ、というものです。ですからすでに貢いだもののなかから利用できるものをさがしだし、「ありもの」と「ありもの」を繋ぎあわせるという方法をとるとというのが私たちの現実でした。

「ありもの」を別物に置き換えることに何の意味があるのか、あたかもそれはナンセンスといわんばかりの非難を受けました。創造行為ではないというのです。しかし、意味があるのかないか自分でその作業をやってみることは、馬鹿げているようで実は大切なことなのです。コンテンツとは何なのかを知ったのは、馬鹿げたつらい作業をかさねた結果つかんだものでした。コンテンツとはコンテンツとコンテンツに文脈をつけることをいうのです。そこに文脈を張る幾千本もの細い糸ともいえる読者とのつながりこそ、文脈の正体なのです。

「ありもの」に新たな文脈をつけるための方法として、私たちの電子出版は位置づけられました。一つの代表的文脈として、それを語りうる知識というものがあるでしょう。知識がどこにあるのかといえ、多くの場合、人の内部に潜んでいるのです。



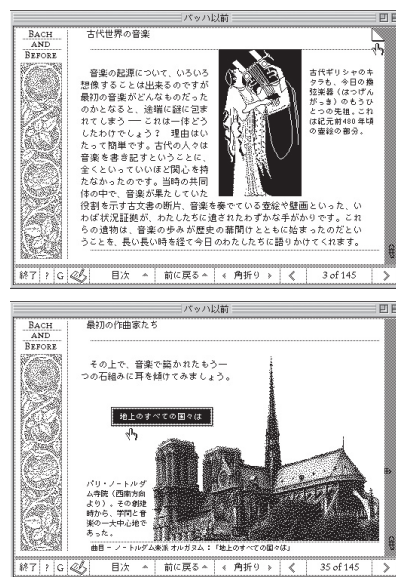
イラスト：小島武

アラン・リッチ おでこに眼鏡を挟んでいた

『アラン・リッチの“ぼくならこう聴く”』というキャッチフレーズを入れて『クラシック音楽ガイド』シリーズが企画されたのは、少なからず知識を持つ人と技術との調和を再構築したかった私たちの意志でし

た。知識を持つ人は必ずしも技術の達人ではない、しかし二つが融合して知識を共有できるかたちに流通できるなら、潜んでいるものを表に出すことができるわけです。両者は今こそ手を組むべきではないか、と。

アラン・リッチはロサンゼルスで人気のあったクラシックのラジオ番組を担当するベテラン評論家で、その時68歳でした。彼の豊富なクラシックレコードの知識と一枚のCDとを結びつけて、これをパソコンの画面上に一致させることができれば、読者に新たな文脈をあたえる契機になるはずだという考えでした。



『クラシック音楽ガイド』シリーズ第一弾“バッハ以前”の画面。モノクロ、512×384のサイズ。目次、ページ送り、ノンブル、ページ角折り (dog ear といった)、クリップなど、本のインターフェースを意識していることがわかる。『オーケストラがやってきた』というテレビ番組を制作していた「テレビマンユニオン」のスタッフが日本語版に参加していた。

アラン・リッチのエッセーの随所にボタンが仕込まれており、読みながらこのボタンを押すことによって、本の内容を耳から確認し理解できた。単純だがこれほど目から鱗が落ちる“本”はみたこともなかった。人のもつ知識への素直な尊敬がわいてくる。



日本語版パッケージ。英語版をそのまま輸入し“帯”をつけ、フロッピーで日本語電子本データを付けた。

❖ビートルズがやってきた



『A Hard Day's Night』LD版(左)とCD-ROM版やがてデジタルの世界に動画映像がやってきました。『A Hard Day's Night』が米国ボージャーで制作されたのです。当時はまだ、これがどんなものか誰もよくわかっていなかったのです。1992年のCD-ROM版は、全編90分の映画をQuickTimeでまるまる収録したうえに、シナリオやインタビューなど、数々の付録が入っていったかたちでできあがりました。



本とおなじ要領で目次がある(左)、最初の章をクリックすると、本文(右)が開き、QuickTimeムービーによるオープニング映像が『I'll Cry Instead』のサウンドとともに動きだす。モノクロとはいえ90分の映像がまるまる入ることなど当時ほとんど考えられなかったし、映像の品質もかなりのものだった。実は、この品質はLDの静止画像を一コマずつQuickTimeに取込むという途方もない忍耐作業のたまものだった。

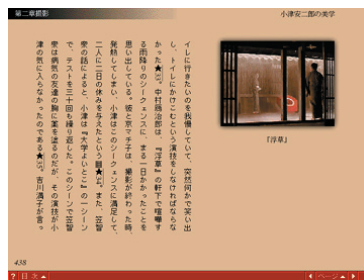


目次パレットから「Song」を選び『And I love her』を表示させると、映画の該当シーンがでてメロディーが流れる。ムービーの画像サイズは通常は208×156だった。これを面積比で4倍の416×312でプレビューできたのだが、モザイク状の画素がめだって、お世辞にもいいとはいえなかった。右が拡大された映像。

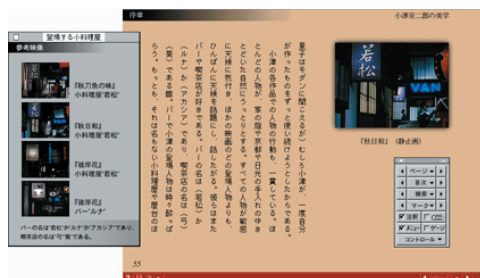
❖小津安二郎 映画の中の日本

ボージャーが推進した電子出版は、その多くを「エキスパンドブック (Expanded Book)」というソフトウェアによって開発されました。当然日本のチームはローカライズに当たったわけですが、結構な難問に遭遇しました。ここでも経済的な苦勞が一番であることはわかりありません。そこで、東芝EMIが企画した映画監督「小津安二郎」の電子出版『The Complete OZU』を部分的に請負うかたちで下請けに入り、本格的な「エキスパンドブック」の日本語化の開発のテストケースとして実験させてもらったのです。日本映画を海外に紹介した評論家ドナルド・リチーの著作、「映画の中の日本——小津安二郎の美学」を実際の映画から参照できる対応をしたのです。

日本的「縦書き」表示もなされましたし、ルビや禁則などについても配慮されました。しかし根本のところは、先行した事例から多くのことを学び、それを日本の状況の中へもってきたということです。『A Hard Day's Night』や『クラシック音楽ガイド』といった黎明期の電子出版が目指したデザインの片鱗を、日本語の作品のなかに幾多にも見ることができます。

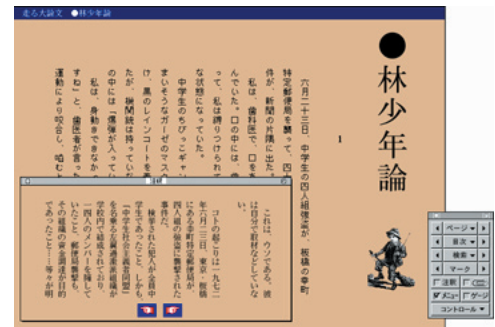


日本語版「エキスパンドブック」開発の試作となった『The Complete OZU』の版面。映画『浮草』で中村雁治郎と京マチ子が喧嘩する雨のシーンが表示されている。今は亡き宮川一夫カメラマンの美しい映像と版面の色調が絶妙に調和している。ボージャー米国スタッフは、仕上がりの質の高さに大きなため息を吐いた。



コントロール・パレットは、日米まったく同じデザインだった。小津安二郎の映画では、よく小料理屋がでてくるが、どの映画でも似通ったお馴染みの店構え

なっていた。注釈には、1994年11月7日付けで届けられた“林少年”こと林信吾さんからの反論が掲載されている。「これはウソである。彼は自分で取材などしていない。」とあり、「そういうあんたは、一体なんなのかね？自分のイメージの中にある“林少年”をダシにして、原稿料をしっかりと稼ぐ、一番タチの悪い<鬼>じゃないのかね？……」と書かれてある。



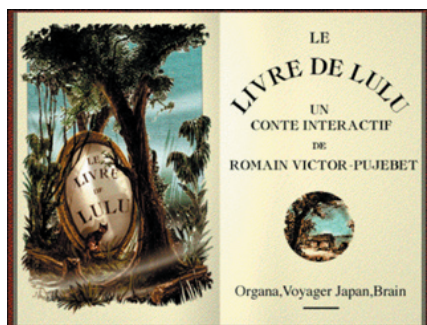
❖ はじめて作った絵本

本であるということ、本に似ているということ、本だけではないということ、この点について触れてみる必要があるとおもいます。電子出版はいつも本を越えたいという欲望をぶら下げて歩いていました。シンプルで“ローテク”ともいえる紙の本に対して電子本は“ハイテク”だと考えていたからです。最初の頃は、威力をみせつけたいがあまり、ハード指向の“ハイテク”が蔓延したのです。しかし全ては短命に終わりました。そこで少しは考えるようになってきたのです。

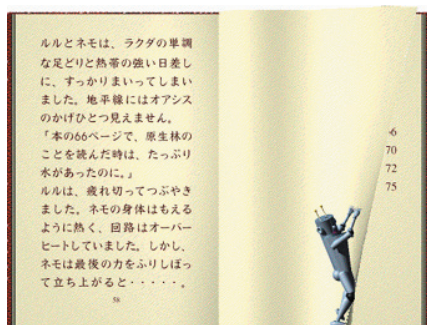


むかしながらのおとぎ話のような題材をつかい、“本”を舞台にして、本以上のファンタジーをつくろうとした試みがありました。ポイジャーのパリ事務所にいたアリー・スタイン(その後独立して Organa を設立)が企画の中心となり、これにフランスの大手出版社フラマリオンが資金的バックアップを与えて大掛かりな発展をしたのが『LE LIVRE DE LULU (ルルの本)』でした。

ヨーロッパ調の美しい本の中に住む少女を主人公としたもので、“舞台”が本なのです。本というパッケージされた世界の閉塞性を下敷きに、そこから飛び出るという願望を、本を越えるイメージとしてちりばめた仕掛けをもっていました。単純に動くだけではなく、アクセスの仕方によってあたかも変幻自在に動くかのようにつくられています。特に、本は視覚的に平面で挿絵も二次元のイメージですが、挿絵が三次元立体となって起き上がり、平面的な本のうえを随所に動き回ります。これは見るものに素朴な感動を与えました。



『LE LIVRE DE LULU (ルルの本)』。トップページが開かれたところ。懐かしい昔の本の雰囲気を読ませる。作者のロマン・ビクトル・プジュベはこれによって最初の電子出版作品でした。電子的な本に対するプジュベの率直な希望や願望が込められたメッセージとなっている。不思議な新鮮さが人々を驚かせました。

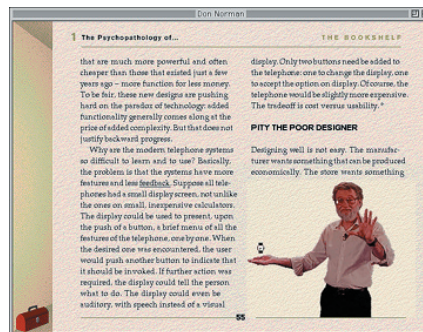


暑さにオーバーヒートしたロボット「ネモ」は、本のうえに立ち上がって自分でページをめくり、原生林が記された 66 ページへいこうとします。二次元の本と三次元の表示が調和して、童話の世界に新鮮なファンタジーを加味させています。

❖ファンタジーを越えて

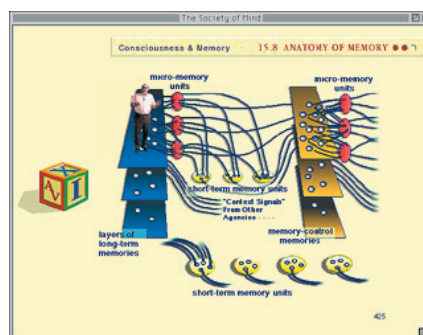
フレームで切り取られたいわゆる映画の枠付映像を本のうえに表示するのではなく、枠を取り去り、本にメリ込ませて対象を自在に表示するという考えは、何度か試みられた手法でした。ドン・ノーマン博士の『機械時代における人間性の擁護』でも、マービン・ミン

スキー博士の『心の社会』においても、同様のことは試みられました。難解な専門書をひも解く手段としてこの方法を利用するのか、あるいは児童書のファンタジーとしてつかうのか、手段の適応ということでは、選択の広がりには着実にたたらされつつあったということでしょう。



ドン・ノーマン博士本人が登場して説明するページ。博士が手を差し出すと、掌に「時計マーク」が現れる。そしてアクセスの待ちを意味する「時計マーク」についての解説がなされると、今まで以上に強烈な印象となりました。博士をスタジオでブルーバックで撮影し、背景を透明に抜いた QuickTime ムービーをはめ込んだ。『機械時代における人間性の擁護』より

一体それがなにを意味するのか、ミンスキー博士が脳の回路を示した図のうえに登場して話しかけてきます。図の中の人物によって、無機的な図が親しみをもって受け入れられる事実を私たちは発見したように感じました。『マービン・ミンスキー・心の社会』より



❖すべては無駄であったのか？

ここでご紹介した試みの数々は、すでに歴史的なものです。『アメリカ自然史博物館』もその一つです。博物館をデジタル化して、子どもの机のうえに再構成してやろうという意欲的なものでした。しかし、希望や情熱とは裏腹に市場に受入れられることなく無念の涙をのんで消え去ってしまったのです。すべては無駄であったのでしょうか？ いやそうではないです。むしろ

多くの経験が人に確かな道をみいださせていくのではないのでしょうか。

私たちはそこから原稿をとりだしてみました。



すでに忘れ去られてしまった作品を、新しい仕組みのなかに置き換えてみたのです。データをボイジャーのドットブック(.book)形式にして、携帯電話に書出してみました。

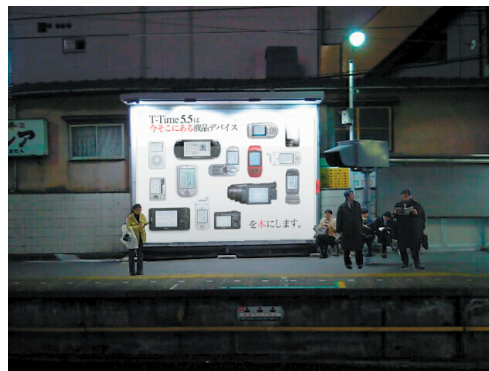
Treasure とは何なのか、この作品をあらためて私たちは見つめ直しました。まさに象徴として。古色蒼然とした骨や化石、世界最大といわれるスターサファイアTreasure とは、そこにある宝物ではなく、これらを見る私たちの心に存在しているものです。人としての誇りを心に注ぐことこそメディアにたいする私たちの大きな仕事なのです。

いまや世の中にはたくさんの電子デバイスが満ちあふれています。パソコン、携帯電話、ゲーム機、デジカメ そして iPhone や Android。これらの液晶画面をすべて本の 1 ページだと考えた私たちの発想は現実のものとなってきました。気付いたらここまで長い年月が流れていたのです。こうしたデバイスは、紙から遊離した文字を包含するかたちで、情報をキャッチするビークルの役割を演じていくことでしょう。良きにつけ、悪きにつけ。インターネット上に存在する多くのアーカイブは、おそらく自在に本となってあなたの手元に届けられる最も確かな出版の姿を突きつ

けていくのではないのでしょうか。あるいはアーカイブをベースにコンテキストを付与される数多の本が作られていくのではないのでしょうか。売れようと売れまいと、瞬時にその在処を検索し、配信するもっとも頼りとなるジャーナリズムを形成していくのかもしれない。

最後に一枚の写真をお見せします。これはいたずらに加工された写真です こうなればいいなあとおもったのです。

私たちはこういうように皆さんのそばにいたいと願いつづけてきたのです。決して格好つけるのではなく、質素で、安価で、柔軟に、したたかに、庶民の懐ふかく、人々のつましい知恵を支えるメディアとして



(終)

 **VOYAGER**

電子出版にご興味をお持ちの方に、以下資料もご用意しております。

●個人で出版をお考えの方に
「電子出版を 10 分で理解する本」

●電子出版をお考えの企業の方に
「ドットブックへようこそ」

その他

- ボイジャーの電子出版技術について
(T-Time/.book/Crochet/azur など)
- 電子書籍販売サイト「理想書店」について
- 携帯 / モバイル向けコンテンツについて
- 各種コンテンツ制作ツールについて

どうぞお気軽にお問い合わせください。
(各種資料のご請求も以下まで):

株式会社ボイジャー

HP:<http://www.voyager.co.jp/>

住所: 〒 150-0001 東京都渋谷区神宮前 5 - 41 - 14

e-mail: infomgr@voyager.co.jp

T E L: 03-5467-7070

F A X: 03-5467-7080

いくつもの本を連動させ、相互にリンクして情報を把握する

T-Time Crochet (ティータイム・クロッシェ) という電子出版技術について

<http://www.dotbook.jp/crochet/>



T-Time Crochet を利用した出版サイト <http://www.dotbook.jp/crochet/links.html>



講談社コミックプラス <http://kc.kodansha.co.jp/>

講談社のコミックに関する様々な情報を提供、無料でコミックが読める試し読み、サイト限定のイベント、応援や投稿などができるサービスなど、講談社コミックがまるごと楽しめるユーザー参加型サイト。



角川学芸出版 <http://www.kadokawagakugei.com/magazine/>

学術・ノンフィクションを中心に、小説・エッセイ・対談など、単なるエンターテインメントでは物足りない、知的好奇心にあふれた方々に訴えるコンテンツを次々と配信。



NHK 出版 Web マガジン <http://www.nhk-book.co.jp/magazine/>

小説、エッセイ、ノンフィクションなど人気作家の連載から、話題の人のインタビューなど様々なコンテンツを発信。



幻冬舎コミックス Web コミック GENZO <http://www.gentosha-comics.net/genzo/>

本格漫画誌配信サイト

Web スピカ有償配信がはじまりました。無料の試し読みもできます。



映画『河童のクゥと夏休み』はどう作られたか? <http://www.dotbook.jp/coo/>

一つの映画には技と英知とエネルギーが詰まっている。見るだけでこれを知る人はまずいない。理解には凝視が必要だ。

T-Time Crochet 動作環境

Windows ・OS: Windows 2000 SP4 / Windows XP / Windows Vista

・ブラウザ: Microsoft Internet Explorer 5.5 SP2 以上、Firefox 1.5 以上 (2.0 以上推奨)

Mac OS ・OS: Mac OS X 10.3.9 以上

・ブラウザ: Safari 2.0 以上 / Firefox 1.5 以上 (2.0 以上推奨)

※導入・制作に関するお問い合わせ: supportmgr@voyager.co.jp まで

本カタログ記載の内容は予告なく変更することがあります。

* T-Time、ドットブック (.book)、ドットプレス (.press)、クロッシェ (Crochet) は、株式会社ボイジャーの登録商標です。

* QR コードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

* iPhone、iPod touch は、Apple Inc. の商標です。

その他記載されている会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。